

新型コロナウイルス感染症（COVID-19）危機下における 「キリスト教概論Ⅰ」の遠隔授業体制をめぐって ー神学のおよび教育的対応ー

ネルソン橋本ジョシュア 諒

— 目 次 —

1. はじめに
2. キリスト教教育における受肉と身体^{ボデー}の意味
3. COVID-19感染拡大の影響下におけるキリスト教教育と遠隔授業
4. 振り返りと対応
5. まとめと今後の課題

キーワード：キリスト教教育、遠隔授業、大教室講義

「授業は、依然として、大学制度の中でももっとも可能性を秘めたラディカルな場でありつづけている。⁽¹⁾」

1. はじめに

COVID-19の世界的な大流行（パンデミック）により、私たちの生活は一連の危機に見舞われ、感染拡大防止のための確な対応が迫られている。教育機関も例外なく、学びのあり方から教師と学生の関わり方まで、教育実践のあらゆるレ

NELSON-HASHIMOTO, Joshua Ryo 四国学院大学総合教育研究センター助教、
キリスト教神学・キリスト教教育専攻

ベルでの変化が余儀なくされた。本報告では、COVID-19の影響を受け、2020年度前期開講の「キリスト教概論Ⅰ」の実施要領を中心に報告する。教育体制がかつてないほどの勢いで変貌している—授業のオンライン化による教室での学生および教員の身体性の不在—この転換の時期は、私たちに新たな課題と可能性を投げかけている。本報告は、「キリスト教概論Ⅰ」の教育実践を通して見えてくる「学びの共同体」⁽²⁾における身体性の意義を追求する。

第一に、キリスト教教育のあり方に対する基本的な考えを示し、キリスト教教育者としての教育面での期待目標と神学的な理解について簡潔に説明する。キリスト教信仰の中心に位置付けられる受肉の論理（教理）は、キリスト教教育が教室での身体性をどう捉えているかという点において、重要な考察を提示する。神学的な議論については、カール・バルトの受肉理解、マイラ・リベラやブライアン・バンタムの身体性についての考察に頼ることにする。また、教育者のベル・フックスによる「関与の教育」[engaged pedagogy]と呼ばれる教育パラダイムから、学びにおける身体性の意味についてさらに詳しく検討する。

第二に、COVID-19の感染拡大防止のため「キリスト教概論Ⅰ」の実施方法が非同期型の遠隔授業（オンライン教育）となったことを踏まえて、この変化に伴う様々な課題や妥協点について概説する。eラーニングの実施を可能にしたオンラインプラットフォームである学習管理システム（以下：LMS）の導入による教育面での新たな展開について説明する。具体的には、授業用のデジタル教材の作成を通して、学生がスマートフォン、タブレットやノートパソコンから視聴できる講義動画を提供することができた。また、各授業の予習復習に向けてLMSの機能を使ったオンライン学習環境を整えることで、PDFに変換した授業資料の共有のみならず、リアクションペーパー（コメントシート）やクイズを割り当てることができた。これらの新たな試みをベースにオンラインで行われた大教室講義の経験を評価していきたい。本報告では、特に、学生の参加度や授業に対する関わり方に注目する。

第三に、オンライン授業が直面した諸問題を考察し、前期の間に迫られた決断をさらに詳しく見ていく。感染拡大防止のための突然な対応と授業体制の変化は混乱、動揺、そして講義運営に対する制限を引き起こしたが、LMSの利用を通して様々な対策が実施された。そういう状況の中で、教員そして多くの学生は、

遠隔授業体制において一定の適応力を示し、新しい関わり方を見出すことができた。困難な状況の中でこそ、新しい可能性を発見し、新たな学び方を想像する一歩は、意味深い創造的な教育に通じていくはずである。

1-1. 「キリスト教概論Ⅰ」について

はじめに、「キリスト教概論Ⅰ」の授業形態を取り上げ、説明する。

「キリスト教概論Ⅰ」は、大学1年生を対象とした科目で、現在は6クラスに分かれているが、6クラスのうち4クラスは筆者が担当している（他の2クラスは、非常勤講師が担当⁽³⁾）。15週間に90分講義を15回行い、「キリスト教概論Ⅰ」を履修した後は、「キリスト教概論Ⅱ」が後期にて開講される。これらを併せた2つの必修科目は大学のキリスト教主義を教育面で具現化しているコースとして位置づけられている。

2020年度春学期には、担当した4つのクラスに合計188名の学生が履修し、2年生以上の受講者はわずか14名であった⁽⁴⁾。普段の状況であれば、「キリスト教概論Ⅰ(3)」を除いて約100名収容可能な教室が使用されてきた。

15週間のこの入門講座では、旧約聖書と新約聖書が扱う神学的、文学的、倫理的、歴史的なテーマを大まかに説明し、7週目以降からは日本におけるキリスト教のルーツを辿りつつ、その関係性の中でみられる宗教的、文化的発展を概説した。本授業の内容は勿論キリスト教を中心としているが、キリスト教信者の受講生がほんの一握りであり、日本のキリスト教信者人口が全体の約1%といわれる現実をよく表している。成績評価については、出席と期末レポートが評価の2大部分を占めている。期末レポートは、全体評価の60%を占める最も重要な課題である⁽⁵⁾。授業出席と参加度は30%で、チャペルへの参加が全体の10%を占める。COVID-19のパンデミックのために、すべての授業がオンラインで行われ、講義の第3週からはLMSが講義形態の主要プラットフォームとして使用された。

2. キリスト教教育における受肉と^{ボディ}身体の意味

はじめに、本報告では、キリスト教教育の観点から教育現場と実践に通底する神学的、教育的思想の潮流を明らかにしていく。キリスト教における〈受肉〉はキリスト教教育を形作る重要な〈事件〉であると主張する。キリスト教教育を根底から支える受肉の論理は、身体性を重視している。言い換えれば、私たちの〈からだ〉は、キリスト教教育にとって中心的な関心事である。受肉の論理は、キリスト教の身体観をどのように形成しているのだろうか。身体性の重要さ、また身体的生の限界を扱うことにする。この問題を追求し、さらには、ベル・フックスの教育実践を検討していくことで、キリスト教教育と受肉の関係性についての議論の再構築を試みる。また、ベル・フックスが打ち出す「関与の教育」に対する理解と、キリスト教教育の受肉的アプローチとの間には、興味深い共通点がある。ベル・フックスの教育的パラダイムはこれから取り上げる身体性の問題に新しい光を当てることができる。⁽⁶⁾ それでは、キリスト教における受肉の論理はキリスト教教育にとってどのような意味をもたらすだろうか。

神が肉体を持つ人間となった（＝身体的生を受けた）というキリスト教信仰は、キリスト教の伝統における中心的な〈事件〉である。この神学的な関心は具体的にはキリスト論を通して探求され、受肉を取り巻く議論として発展した。本報告では、受肉の教理をめぐる歴史的、神学的な展開や論争については深く掘り下げるつもりはない。しかし、からだの復活と聖餐論（ユーカリスト）的な実践を伴う信仰と並行して、受肉の論理だけではなく、キリスト教の伝統全体は身体化されたいのち（身体的生）を色濃く捉えていると言えよう。キリスト教は肉体を離れた霊的、精神的な事柄や存在だけに関心を示しているのではなく、キリスト教信仰は、私たちの身体的生、そして最も重要なこととして神の「人間性」を肯定している—その人間性とは、無力な赤ん坊、また十字架上に決定的に顕現した傷つき、裂かれたからだの露出から確認できる身体性を包含し、非抑圧者と切り離すことができない人間性のことである。その結果、キリスト教信仰と神の啓示は、身体と精神を二項対立的に捉えていない。というのも、キリスト教人間学は、神のケノーシスに関する見解から発展している⁽⁸⁾。キリスト教思想における神のケノーシス、および受肉の中心性は、私たちの〈からだ〉の重要性を提示する。したがっ⁽⁹⁾

て、キリスト教教育は身体性をないがしろにはできない。インマヌエルと呼ばれ、「神は我々と共に⁽¹⁰⁾おられる」受肉の論理は、本報告の目的から見ても、特に教育との関係の中で身体性の意味を捉え直し、新たな神学的枠組みの発展に寄与する。

身体は音声に頼らない〈物語〉を常に語る。そして、これらの〈物語〉は、人種、ジェンダー、障碍の有無等、私たちの身体的生、そしてその表象の理解を形成し、日常生活の現実を決定づける社会構造と不可分に絡み合っている。加えて、私たちの身体的生は神学者マイラ・リベラが指摘するように資本主義的価値観によって動かされている。⁽¹¹⁾したがって、教室での私たちの身体⁽¹¹⁾の存在は、様々な意味と効果を持ち、表象としての機能を持つ。教室で声を上げ始める前に、私たちの身体はコミュニケーションの〈場〉となる。身体と身体が〈出会う〉とき、自己について、また他者について創り出される単純化された〈物語〉を解体する、あるいは逆に助長する場合がある。私たちの身体性に付属する意味についての批判的な眼差しや真剣な考察がなければ、教室におけるインターアクションは偏見を生み出すことになる。そして、教室でのこうした身体との〈出会い〉は、しばしば厄介に複雑なものになることは間違いない。他者に向けられる認識は、決して白紙ではなく、故意的、または無意識の先入観により汚染されているからだ。⁽¹²⁾身体を隠すことができない教室のような物理的空間では、私たち自身の身体がどのように機能しているか—〈からだ〉の政治—に対する批判的な省察と認識が必要となる。この作業への真摯な取り組みは、ベル・フックスが言うような解放的な学習環境を作り出す重要なステップとなる。⁽¹³⁾学びの共同体が今後建設的で批判的な議論を進めていくには、現在と過去における身体をめぐる議論に注目し、あらゆる支配的な構造を暴き、それらを解体していかざるをえないのである。さらに、キリスト教教育は、傷ついた者や抑圧された者との連帯を見出し、受肉の論理とイエスの十字架理解を中心とした身体観を発展させることを目指すのである。

ベル・フックスによって探求された「自由の実践」としての教育は、教育者としての在り方とアプローチに重要な〈気づき〉を与える。ブラジルの教育思想家パウロ・フレイレとベトナムの仏僧ティック・ナット・ハンの影響を受けたベル・フックスの「関与の教育」は、教室にて「批判精神とアンガージュマン」を促進し、学生一人ひとりが「授業のダイナミズムに関係して」いること、また「アクティブな参加者」である⁽¹⁴⁾ことを前提とする。授業の中で「学生と教師の間に相互

関係「筆者訳」が構築され、相互の学びが後押しされる教育実践である。⁽¹⁵⁾ フックスは教師として「心とからだの分離」に疑問を投げかけ、「自分と向き合う意欲」、「自分の生を証しする作業」[self-actualization]を教育の中心的な実践として取り上げている。⁽¹⁶⁾ 「自由の実践」である「関与の教育」における教師像とは、教室において「もっとも傷つきやすい存在になること、心とからだと魂の全体をさらす存在として、学生たちの前に立つことを求められる」とフックスは言う。⁽¹⁷⁾ そして、その姿勢は教師だけではなく、学生にも求められる。フックスが述べるように「関与の教育は教室において、全体性 [wholeness] を受け入れ、学生が完全に心を開くことができる、正直になれる場である「筆者訳」」。⁽¹⁸⁾ 「関与の教育」では、キリスト教の受肉の論理と同様に、エンボディメント（身体化）がその思想の中核に置かれている。ベル・フックスが呼ぶ「関与の教育」の理解を深めていくにつれ、教室に参加する意味の再検討を開始することができる。このオルタナティブな教育アプローチが与える鋭い洞察から、授業の在り方に関わる私たちの身体性の意味と機能についての健全な議論が促進される。フックスの教育実践とキリスト教の受肉論理は、キリスト教教育の新たな発展に役立つことになるであろう。

COVID-19のアウトブレイクの発生時に多くの対策が取られた。その一つの必然的な結果ともいえるべきものは、教室における身体性の損失である。私たちは教室で互いを視ることも、聴くことも、においを嗅ぐことも、触れることもできなくなった。非身体的な学びの場は、この意味でキリスト教教育の〈質〉を大きく揺さぶった。〈智〉の探求は知性と精神といった〈不可視性〉に限らない--身体性や体感とも深く結びつくのである。これまでの議論に忠実であるならば、COVID-19の感染症蔓延期は、学びの共同体が目指す教育を大きく妨げたことになるだろう。本報告ではこの後、この数ヶ月間を通して展開した非同期型の遠隔授業についての分析と見解を述べる。また同時に、この公衆衛生危機の中から教育実践における新たな可能性を模索していきたい。

3. COVID-19感染拡大の影響下におけるキリスト教教育と遠隔授業

2020年度春学期開講の「キリスト教概論Ⅰ」が、COVID-19が感染拡大していく中でどのように実施されたかについて、その展開の内容を紹介する。担当した4クラスに注目する。既に、大教室講義の実施については授業運営と学習面において大変な努力を要するが、授業開始からオンラインプラットフォームへの移行も、授業の実施方法に予想外の変化をもたらした。最も注目すべき点は、第3週目からLMSが導入されたことである。実践的およびテクニカルな面での変化を以下の表とともに確認していき、eラーニングの課題と特徴を説明していく。

本授業の運営については、初期段階から実践的、またテクニカルな変化があったが、本報告では、第3週目からのLMS活動に焦点を当てていく。授業開始日は1週間延期され、安全面を考慮して4月中旬から遠隔授業としてスタートした。LMSがキャンパスネットワークに設置される前の最初の2週間は、Googleフォームと同社が提供するYouTubeを活用し、インターネットを通じて課題を出し、授業資料を共有した。いわゆる、オンデマンド型の授業形態を駆使しながら、授業を展開した。オンライン授業に移行した結果、各週の講義運営が簡素化され、週の初めに各授業の内容を一度に提供することが可能となった。その結果、映像授業の準備と作成には手間がかかるが、同じ内容の講義を週に4回行う必要がなくなり、講義の実施については教員側の負担は若干軽減されたとも言える。

第3週目から本格的にLMSの活用を開始し、残りの週ではLMSを利用した基本的な遠隔授業体制を維持した。その基本的な遠隔授業体制の実態について詳しく説明していく。まず、各講義用の講義映像を作成し、映像を視聴できるURLとPDF化したパワーポイントのファイルに併せて、講義内容を補足するリーディング課題のPDFをLMSにアップロードした。講義映像はYouTubeを通じて「unlisted」（非掲載）オプションとして設定し、限定公開の映像へのURLを持つ受講生は授業時間以外でもいつでも映像を視聴することが可能となった。受講生は映像ファイルをダウンロードする必要がないため、インターネット環境が整っていれば、スマートフォンやノートパソコンなどでいつでも視聴することができる。各講義映像時間は20～40分の長さで、一つの講義につき第二部（パート2）や第

三部（パート3）を加え、場合によっては3部制の映像を作成し、提供した。また、LMSの機能を利用し、課題を作成し、毎週割り当てた。課題の形式としては、記述問題、複数選択問題や○×問題を受講生に表示した。出席確認は毎週行い、受講生がこれらの課題をオンラインで提出することで出席、また授業への参加とみなした。

オンライン課題に対しての取り組みについて詳しく見ていきたい。表(1)は、課題が未提出、未完了の学生数を示したものである。この表はLMS上の課題に対して無反応であった受講生数を表すものであり、課題を途中までやったとしてもこの表には反映されていない。また、多くの無反応であった学生は繰り返しオンライン課題に取り組みなかったため、無反応のリピーターが多くいたことも指摘しなければいけない。表(1)が示すように、未提出者数は全体の割合の3分の1未満、時には2割を下回る結果となっている。LMSを介して課題や講義内容に応じて毎週授業に参加した学生は過半数を占めている。しかし、クラス別では、「キリスト教概論 I (2)」と「キリスト教概論 I (3)」については、未提出者数が比較的多いことが分かる。このデータは、LMSやインターネット全般の利用に対する学生の対応の仕方を一部示していて、受講生から受けた質問や相談の内容を確認していく必要がある。例えば、大学側が実施した「2020年度前期授業改善アンケート調査」によれば、「キリスト教概論 I (1)」の受講生でLMSへのログイン方法に問題があったというコメントがあった。このように、テクニカルな面の問題が、今学期の授業参加に影響を及ぼしたとも言えるが、授業参加については例年のように対面授業であっても欠席する学生がいるので、オンラインの問題として簡単に片付けることはできない。平均では大体8割の学生が授業内容に反応を示したということは、オンラインの取り組みが大きな障害となったとは言えない。8割近くの学生は深刻な問題なくLMSを通じて課題を提出できた。

表(2)は、YouTube上の講義映像の視聴回数を示している。表(2)の視聴回数は、映像を一部しか視聴していない可能性やURLを持つ非受講生の視聴は反映されていない。このデータは実際に講義を視聴している受講生の数とは多少の差異はあるが、受講生のオンライン教材への取り組みについての情報を大まかに表示している。総合的に見ていくと、大半の学生は少なくとも講義映像の第一部（パート1）を視聴しているが、パート2やパート3については視聴回数が減少傾向にあ

る。多くの学生は講義全体を視聴していないということである。第8週目、第11週目、第13週目、第14週目、第15週目については、視聴回数が授業履修者の総数を下回っている。視聴回数を増やしていく工夫が必要ではあるが、講義の映像化がすべてディメリットに終わったわけではない。前述のとおり、講義の映像化は、教師側としては業務の負担軽減につながっている。また、講義映像のもう一つの利点は、受講生が好きな時に視聴できること（オンデマンド型）、そして集中力を維持するために回数を分けて観ることさえもできるということである。最大のメリットは、例えば、大学側が提供したアンケート調査に記されていた学生のコメントに表れている。そのコメント内容とは、講義のわからない部分については映像を止めて、時間をかけて学習ができたというものである。このように、講義映像は内容の理解と消化に時間を必要とする受講生には有益な手段であるとも言

表1 LMS無反応 学生数

	キリスト教概論 I (1)	キリスト教概論 I (2)	キリスト教概論 I (3)	キリスト教概論 I (5)	全体に対する未提出者数の割合
第 3 回	4	30	1	11	24%
第 4 回	5	24	2	11	22%
第 5 回	3	22	2	9	19%
第 6 回	4	22	4	10	21%
第 7 回	6	20	3	8	20%
第 8 回	4	20	4	10	20%
第 9 回	5	17	4	8	18%
第 1 0 回	6	14	3	8	16%
第 1 1 回	4	18	3	7	17%
第 1 2 回	5	19	4	9	20%
第 1 3 回	6	20	3	11	21%
第 1 4 回	6	30	4	10	27%
第 1 5 回	6	26	4	12	26%
期末レポート	5	17	3	6	16%

える。映像はまた、学習方法への柔軟性を高め、90分間といった限られた授業時間の枠内に受講生を縛らない効果がある。

表2 映像授業の視聴回数

	パート1	パート2	パート3
第1回	526	279	無
第2回	316	186	無
第3回	390	248	281
第4回	208	165	無
第5回	257	207	無
第6回	215	150	無
第7回	286	178	無
第8回	172	102	無
第9回	ドキュメンタリー映画を視聴		
第10回	241	196	無
第11回	153	152	無
第12回	239	183	無
第13回	143	105	無
第14回	93	無	無
第15回	77	65	無

生が多くいた。

今日の大学生達はデジタル時代に生まれ、周りにインターネットやスマートフォンがある環境に育ったことがこの遠隔授業中の取り組みに影響を与えたように考えられる。テクノロジーに精通していなくても、あるいはノートパソコンを個人的に所有していなくても、オンライン上のコミュニケーションが〈普通〉になった今、授業内容に対するコメントなどをオンラインですることは、多くの受講生にとっては利点であったに違いない。総務省の調査によれば、10代後半から20代前半のインターネット利用者の割合、スマートフォンを通してインターネットへ

一部の受講生にとっては、LMSの活用と遠隔授業体制は過度な負担を負わせることになったが、オンライン上の授業内容への取り組みの質については感心するケースも多くあった。特に、作文型記述問題に対する解答の中には期待以上のものがあり、全体的に見て、例年に比べて授業内容への関わり方が深まった受講生が多くいたように見受けられた。例年の授業では、授業時間に出席簿を回し、またはコメントシートの記入を通して、出席状況を記録していた。しかし、授業時間に限らないかたちで、課題をオンラインで提供することで、意見交換や自分の考えをより上手く表現できた受講

接続している割合は、両者とも90%以上であり、20代のスマートフォンの個人保有率は90%を上回る⁽¹⁹⁾。この調査や、またこの数ヶ月のオンライン教育からも確認できるように、今日において意味を持つ教育的手法として、学びのプロセスにおいてスマートフォンや他のテクノロジーの使用は不可欠である。今日のテクノロジーを創造的に革新し、教育プロセスに取り入れることは、COVID-19の大流行後も、学びのコミュニティに関わるすべての人にとって、喫緊な課題である。

4. 振り返りと対応

前半で述べたキリスト教教育に関する基本的な見解を踏まえ、以下ではCOVID-19危機下における教育実践について振り返りたい。COVID-19の感染拡大の困難の中で示した神学的、教育的な対応について述べる。一方で、教室における身体性の欠如は一定の便利さと効果をもたらすが、キリスト教教育に誠実に従事する場合、学びの共同体の「オンライン化」に伴う課題とジレンマと向き合わなければならない。COVID-19パンデミックが引き起こした遠隔授業体制の全体像を描くことはできないが、2020年度春学期開講の「キリスト教概論Ⅰ」の実施を振り返り、神学的、教育的な対応の一部を紹介していきたい。

LMSを介してのオンライン授業の帰結の一つは、教室での身体性の不在であり、それは学びの共同体が互いにコミュニケーションをとるための基本的な手段が失われたことを意味する。互いに向けられる〈まなざし〉が一部損なわれたのだ。これには、文字通り、互いの表情を読み取ることができない事態を含む。オンライン上で有意義なつながりを持つことは勿論可能ではあるが、講義の教材をオンラインで提供し、また対面での交流がなくなることは、例年と比べて、学びの共同体を構成する教師と学生の相互関係や意見交換の手段に大きな変化をもたらすことでもあった。LMSは、コミュニケーションにおいて新しい方法を提供し、一部の学生は授業内容に参加したりするためにこれらの機能を上手く使いこなすことができた。また、前述したように、スマートフォンの普及により、既に電子メールをはじめとするオンラインコミュニケーションが従来型のコミュニケーション手段となっていることもあり、電子メールを通して、多くの学生が教員に対して質問をしたり、メッセージを送ったりすることをためらわなかった。しかし、

オンラインでコミュニケーションをとる方法に共通する重要なポイントとは、身体性の不在の中で授業についてのやり取りが行われたことである。

危機の最中に置かれた学びの共同体として、まず内省的に、教室にて身体性が取り除かれる過程で私たちは何を失っているのかを自問しなければならない。もし私たちが互いの関わり方における変化の程度を気にすることがなければ、教室での身体が存在が果たす役割を損なうことになる。実際、私たちは、身体性の不在とオンラインコミュニケーションが関係の構築の理想的な形であると考えるのであれば、結果として自分自身を欺くことになる。⁽²⁰⁾ 神学的にも教育学的にも、本報告の根本的な主張は、教室において身体は重要だということであった。もちろんこの点は身体的生が有限の存在にもたらず、問題（バイアスや先入観等）とその複雑な相互作用を無視するものではない。

これまでの説明で示した表と見解の一部からも確認できる通り、授業に対する一定のレベルの参加が認められた。しかし、COVID-19の感染拡大を防止するために、オンラインプラットフォーム上で授業が実施されたことは、学びの共同体として、授業内容への取り組み方や互いとの関わり方、また学びのあり方について大きな変化をもたらすこととなった。授業のあり方、また教師と学生の関係性を制限する大教室講義として既に多くの課題を抱えているが、遠隔授業の実施は、教室における身体性の神学的、教育的意味をより一層批判的に議論していく必要性を孕んでいる。なぜなら、大人数クラスであっても、学びの共同体において身体性の不在は、教育のあり方を根本的に変容させる結果をもたらすからである。

5. まとめと今後の課題

COVID-19の感染拡大のリスクを下げるために、2020年度春学期開講の「キリスト教概論Ⅰ」はオンラインプラットフォームに移行する決断は避けられなかった。LMSの活用を通して、講義資料の共有、そして学生と教員の関わり方を管理する教室空間に代わるデジタル空間が開設された。本報告の前半では、受肉の論理と身体性、また「関与の教育」の関係性に基づいた、神学および教育的アプローチを使った、健全な解釈的枠組みの基礎の構築を試みた。次に、LMSなどのオンライン機能を使用した授業の実施方法についての説明を提示した。授業

に対する学生の参加とオンライン学習環境への適応に注目した。この異例な授業形態に対応して、前期の経験を踏まえた振り返りを行なった。キリスト教教育者として、教室から身体が完全に取り除かれることは理想的ではない。また、学びの共同体としては、学びのプロセスの中で、身体と身体との〈触れ合い〉が失われるという課題に今後もより一層向き合っていく必要がある。教室の内外を問わず、私たちの身体性は重要な問題であり続けることになるだろう。

最後に、eラーニングと大教室講義の課題、また受肉の論理を中心としたキリスト教教育にまつわる議論を前進させていくために、いくつかの指摘を行う。まず、本報告では教室における身体の意味をいくらか探求したが、学びの共同体として、批判的な視点で、教室といった物理的空間において身体がどのように管理されているかという問題に注目したい。例えば、特に大教室講義では、学生が教壇に向いて座る構図自体が、慣れ親しんだ学生と教員の力関係を強化し、学生と教員の間に優劣性を生み出している。アクティブ・ラーニングや「関与の教育」の実践を展開するには、従来の教室デザインにとどまてはいけなない。この意味でeラーニングは、身体が伝統的な様式で縛られない、教室の外にあるため、創造的な可能性を提示することができる。

COVID-19のパンデミックの影響は、今後何年も続くことになる。この深刻な状況を通して学びの共同体が批判的な立場からさまざまな教育の実践を行う中で、ある本質的な問題に触れることになる。学びのプロセスで身体性が覆い隠されても、完全な〈参加〉や〈関わり〉は可能だろうか？この問いは、私たちの身体的生を取り巻く限界や諸問題、また可能性を深く認識させるために、学びの共同体を育成し、新たな認識へと目覚めさせるであろう。キリスト教教育が目指す学びの共同体のインテグリティは、創造的・持続的な思考力、より深い関与、また解放的な教育の実践へのコミットメントにある。このパンデミックの中で、私たちの健康と安全を確保していくために、授業のあり方と進め方に今後も多くの不確実性がきつと突きつけられる。しかし、受肉の論理や「関与の教育」についての議論を呼び起こすことは、私たちの教育にこのような拡大した変化があっても、解放的な教育の実践に近づかせてくれるであろう。教室は決して固定された不変の場ではない。この危機的な状況では、誰もがより自覚的になり、学びの体験に批判的に取り組むことが大切である。オンラインの大教室講義とキリスト教

教育の折り合いの中で、この続く学びの経験から新たな課題や可能性が生じ、これらの議論が今後も発展し深まっていくことになるだろう。

注

- (1) ベル・フックス (2006)『とびこえよ、その囲い--自由の実践としてのフェミニズム教育』新水社、15頁。
- (2) 同上、11頁。
- (3) 本報告は担当する授業に限る。科目名と単位数は変わらないが、授業の内容や形式は担当者の判断によるものである。
- (4) キリスト教概論 I (1)=37名、キリスト教概論 I (2)=86名、キリスト教概論 I (3)=6名、キリスト教概論 I (5)=59名。
- (5) COVID-19の感染拡大対策としてチャペルは6月中のみ実施された。したがって、前期の評価については、チャペルの参加は含まれていない。代わりに、LMSでの課題の提出を出席と参加とみなし、全体の成績に反映させた。
- (6) 本報告ではベル・フックスの教育の方法論と実践をキリスト教化しようとすることを目的としていない。
- (7) カール・バルトは神の人間性について次のことを述べている。「神が真に神であり給うために、神は人間性を排除する必要はなく、非人間性も反人間性も必要ではない。しかし我々はさらにそれ以上のことを見かつ確認することが許されており、またそうせねばならないのであって、神の神性はむしろ人間性をその内に包含しているのである。」カール・バルト著 (1997)『第3巻教義学論集〈下〉(カール・バルト著作集3)』新教出版社、362頁を参照せよ。
- (8) キリスト教人間学の出発点はケノーシスだけではない。筆者のキリスト教人間学の理解を深めた代表的な文献は次のとおりである。Brian Bantum, *Redeeming Mulatto: A Theology of Race and Christian Hybridity* (Waco: Baylor University Press, 2010). Dwight N. Hopkins, *Being Human: Race, Culture, and Religion* (Minneapolis: Fortress Press, 2005). Kelly Brown Douglas, *Stand your Ground: Black Bodies and the Justice of God* (Maryknoll: Orbis Books, 2015). M. Shawn Copeland, *Enfleshing Freedom: Body, Race, and Being* (Minneapolis: Fortress Press, 2010).
- (9) 「イエスの誕生、神がこの世に入った方法は、私たちの身体が重要であることを宣言する。

- [筆者訳]」 Brian Bantum, *The Death of Race: Building a New Christianity in a Racial World* (Minneapolis: Fortress Press, 2016), 73.
- (10) マタイによる福音書1章23節、新共同訳聖書。
- (11) 「メディア、ファッション、フィットネス、化粧品など、多くの産業を通じて働き、理想的で望ましい身体を構築する… [筆者訳]」 Mayra Rivera, *Poetics of the Flesh* (Durham: Duke University Press, 2015), 95.
- (12) 「私たちがお互いの身体を知る方法は、社会がある身体を評価し、他の身体を評価していないことと関係している。メディア、地域社会、教育も、これらすべてが人種主義の世界に引き込むプロセスと関わっている。[筆者訳]」 Brian Bantum, *The Death of Race*, 9.
- (13) 〈いま〉だけに始まった問題ではない。歴史の展開から身体的生とその表象の形成を検討していく必要がある。キリスト教の歴史を一目見ただけで、悲劇的な物語が浮上する。例えば、キリスト教において、帝国主義と白人至上主義によって翻弄された物語や表象は、ある身体的生を優先させ、その過程で〈有色人種〉を抑圧してきた。特定な身体的特徴を名指し、ある集団を支配するという極めて残虐な政策にキリスト教が関与したという認めがたい事実が突きつけられる。キリスト教と〈人種〉の形成との関係性については、Willie James Jennings, *The Christian Imagination: Theology and The Origins of Race* (New Haven: Yale University Press, 2010)を参照せよ。
- (14) ベル・フックス (2006)『とびこえよ、その囲い-自由の実践としてのフェミニズム教育』新水社、11、20頁。そして、bell hooks, *Teaching Critical Thinking: Practical Wisdom* (New York: Routledge, 2010), 21を参照せよ。
- (15) hooks, *Teaching Critical Thinking*, 19.
- (16) ベル・フックス (2006)『とびこえよ、その囲い-自由の実践としてのフェミニズム教育』新水社、24-25頁。
- (17) 同上、28頁。
- (18) hooks, *Teaching Critical Thinking*, 21.
- (19) 総務省 (2018)『第1部 特集 人口減少時代のICTによる持続的成長』(<https://www.soumu.go.jp/johotsusintokei/whitepaper/ja/h30/html/nd142110.html> 最終閲覧日：2020年8月24日)
- (20) ある対談で、ベル・フックスが指摘したことに注目したい。「教師は情報を教えていればよい、からだと切れた、ただの情報を教えていればよいと、私たちは信じ込まされている。とこ

ろが教室のバイアスに批判的であろうとする人たちは、歴史性を帯びた主観としての自分自身を語ろうとすると、どうしたってからだの問題にたち帰っていくはず。わたしたちは、誰もがそれぞれの歴史を背負った主観的存在なのよ。権力をもつ者が指先ひとつで教室をとりしきって、ある人たちの主観を否定してある人たちのそれを許容するという昔ながらのやり方、そういうやり方を脱構築するためには、わたしたちは、どうしても支配の歴史を体現した自分のからだのありようにたち帰って行かなければならない。わたしたちが自らの主観性と有限性・立場性を直視することは、支配の文化が求めてやまないあの物象化を突き崩すことなのよ。」ベル・フックス (2006)『とびこえよ、その囲い-自由の実践としてのフェミニズム教育』新水社、162-163頁を参照せよ。

- (21)「自由の教育をめざすなら、一般に考えられている教育の観念に揺さぶりをかけて、それを変えていかなければならないと思うの。」ベル・フックス (2006)『とびこえよ、その囲い-自由の実践としてのフェミニズム教育』新水社、168頁を参照せよ。

参考文献

- ・ Barth, Karl. *The Humanity of God*. Louisville: Westminster John Knox Press, 1996.
(=寺園喜基訳 (1997)『第3巻 教義学論集〈下〉(カール・バルト著作集3)』新教出版社。)
- ・ Bantum, Brian. *The Death of Race: Building a New Christianity in a Racial World*. Minneapolis: Fortress Press, 2016.
- ・ --- *Redeeming Mulatto: A Theology of Race and Christian Hybridity*. Waco: Baylor University Press, 2010.
- ・ Copeland, M. Shawn. *Enfleshing Freedom: Body, Race, and Being*. Minneapolis: Fortress Press, 2010.
- ・ Douglas, Kelly Brown. *Stand your Ground: Black Bodies and the Justice of God*. Maryknoll: Orbis Books, 2015.
- ・ hooks, bell. *Teaching to Transgress: Education as the Practice of Freedom*. New York: Routledge, 1994. (=里美実・朴和美・堀田碧・吉原令子訳 (2006)『とびこえよ、その囲い-自由の実践としてのフェミニズム教育』新水社)。
- ・ --- *Teaching Critical Thinking: Practical Wisdom*, New York: Routledge, 2010.
- ・ Hopkins, Dwight N. *Being Human: Race, Culture, and Religion*. Minneapolis:

Fortress Press, 2005.

- Jennings, Willie James. *The Christian Imagination: Theology and The Origins of Race*. New Haven: Yale University Press, 2010.
- Rivera, Mayra. *Poetics of the Flesh*. Durham: Duke University Press, 2015.
- 総務省（2018）『第1部 特集 人口減少時代のICTによる持続的成長』（<https://www.soumu.go.jp/johotsusintokei/whitepaper/ja/h30/html/nd142110.html> 最終閲覧日：2020年8月24日）。